

(2011,07,16)区民向け無料講演会のお知らせ

このたび大森医師会が大森赤十字病院放射線科部長の山崎悦夫先生を講師に招き、分かり易く放射線被ばく問題について、解析して頂く。

放射能が見えない、においもしない。見えない健康への被害、見えない不安を我々に植え付ける。その不安がまた新たな不安を招く、という恐怖の連鎖が徐々に我々の心を蝕む。

「福島原発事故」以降、日本全体は沈滞ムードに満ち、我々は言わば出口の見えない暗闇、トンネルの中に置かれている。その暁というか、打開策、処方箋を示してくれるのは山崎先生おいて他にいない。

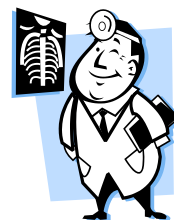
日 時：平成 23 年 7 月 16 日(土) 午後 2 時

場 所：大森医師会館 3 階ホール

講 師：大森赤十字病院 放射線科部長 山崎悦夫

演 題：親子で考えよう放射線被ばく～医師の立場から～

講師略歴



【日時】平成 23 年 7 月 16 日(土) 午後 2 時

【場所】大森医師会館 3 階ホール

【講師】やまぎき山崎 えつお悦夫

大森赤十字病院 放射線科部長

東京医科歯科大学 臨床教授

放射線科専門医

核医学専門医

PET 核医学認定医

医学博士

【講師略歴】

昭和 61 年 秋田大学医学部卒業

昭和 61 年 東京医科歯科大学放射線科入局

平成 01 年 東京医科歯科大学放射線科文部教官助手

平成 08 年 船橋市立医療センター放射線科医長

平成 11 年 東京医科歯科大学放射線科文部教官講師

平成 11 年 大森赤十字病院放射線科副部長

平成 17 年 大森赤十字病院放射線科部長

現在に至る

講演会抄録

広島、長崎の原爆被害者の研究その他から次の事実が知られています。

放射線によって体にそのまま異常がおこる確定的影響は 1000mSV で起こる。この線量は原発事故現場で事態収拾にあたる人以外に一般の人にあり得ない線量です。

$100\sim 200\text{mSV}$ までは発がんの可能性が被ばく量に比例して増える。それ以下では疫学調査では異常が見いだせない。安全管理上はしきい値（それ以下では影響がないという境目）がないという前提で、約束事を決めています。

また、被爆者の子供遺伝的影響は認められない。

従って、現状の放射線量であるならば、発がんの可能性の心配が残ることになります。

1000mSv の被爆でがん死亡が 5% 増加したと言われていています。それ以下は比例で考えます。 100mSV では 0.5% 、 10mSV であれば 0.05% 増加となります。がんはひとつの原因でなることではありませんので、 100mSV の被ばくのがん増加は、野菜不足や受動喫煙の危険（リスク）に相当するそうです。

日常生活の中で、宇宙、大地、食物を通じて放射線をうけており、これらを合わせて自然放射線といいます。世界平均で一人当たり $2.4\text{mSV}/\text{年}$ になり、日本平均 $1.48\text{mSV}/\text{年}$ となります。 1mSV 程度の増加は健康に影響がないといってもいい程度です。

放射線をきちんと管理するためにつくられた基準の数値が、健康被害を意味する数値でないことは心得ておくべきことでしょう。

追い書き

講演会は3連休の初日に当たり、それでも40人近くの区民の皆様にご来場頂きました。会場から沢山質問が飛び交い、外の暑さをも凌ぐ熱気に包まれ、大いに盛り上がりました。

講演の趣旨は、防護学的に言われる被ばく限度量の数値と実際のがんに繋がる被ばく量とは違う事。例えば人体への影響を考えた場合、 100mSv が一つの目安とされる。それ以下

では健康に影響が出た証拠がない。しかし 100mSv の被爆でがん発症率が 1.08 倍に増え、がんによる死亡率が 0.5%上昇(広島・長崎の原爆データ)すると言われても、タバコを吸う場合のがん死亡率(1.6~2.0 倍に up=放射線 2,000mSv 浴びる相当)の方がはるかに大きい。むしろマスコミの曖昧な情報の伝播により、放射線に対する過剰とも言える懸念・恐怖の方がストレスとなり、我々の心を蝕んだ方が余程ダメージが大きい。